

空



作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

いろ

これは、僕の小さい頃の話。

明日は小学校に入ってから初めての図工の時間。僕は二十四色入りの絵の具を買ってもらった。

明日の図工の時間まで待ちきれずに、僕は早速新しい絵の具の包みを解いた。

普通の絵の具は、十色前後しか入っていないため、赤、青、黄などの、言ってみればベーシックな色しか入っていない。

ところが、二十四色入りの絵の具には、変わった色がたくさん入っていた。

紫、灰色、象牙色……自分で何らかの絵の具を混ぜなければできないような色がたくさん入っていた。

そこで、ひととき僕の目を引く色があった。

「そらいろ」

これは「みずいろ」とは違うのだろうか。

僕は明日の図工の時間を心待ちにしていた。

翌日。

ついに図工の時間がやってきました。

課題は風景画。

「皆さん、お外に出て、絵を描きましょー」
その日は快晴で、絶好のスケッチ日和だった。

僕は、どうしても「そらいろ」を試してみたかった。ので、屋上に上がり、空の絵を描こうと思っ

早速ハレットに「そらいろ」の絵の具を出す。水で溶いて、画用紙に一筋、線を描いてみた。
でも、それは「なんか違った」。

絵の具の「そらいろ」は色鮮やかで、きれいだった。けど、「この空の色とはちよつと違う。なんか違う。どうしてもこのまま「そらいろ」で絵を描ききることに僕は納得がいかなかった。

図工の時間は三、四時間目だったので、僕が試行錯誤している間に、皆は絵を描き終えてしまった。先生は「来週に続きを描きましょー」といったが、僕はかたくなに抵抗し続けた。

そうしているうちに、夕方になってしまった。

すると、空は今までは違う色になった。

夕焼け。

僕は、はつと気づき、「そらいろ」も青も白の絵の具を手放し、赤や黄色の絵の具に持ち替えた。

僕は気づいたのだ。「そらいろ」なんて絵の具は存在しないというのだ。

晴れ渡って青い空も、曇っていて黒い空も、夕焼けの赤い空も、みんな空の色。

僕は、やっとのことで絵を描き終えた。

タイトルは、

「そらいろ」

赤い実

魚は空を見ていた

彼が住む川底の上の

きらきらと輝く水面の上の

川岸から枝を伸ばす木々の上

空は澄み渡っていた

魚は水面の外を知りたかった

木々が付ける赤い実を食べたかった

まだ実が青い頃に彼は決めた

その実が熟して川底に落ちるまで

待つてゐるじつじつした

暫く待つと実は黄色くなり

更に待つと真っ赤になった

彼は実が落ちるのを待った

その実は木の枝に付いたまま

名も知らない鳥に食べられた

彼は実が食べられるのを見ていた

鳥はすべに飛び立ち

どこか遠くへと飛んで行った

魚は水面の外を知りたかった

いつか空を飛びたかった

魚は空を見ていた

私は棺桶屋です。

死体が出ると、遺族から寸法を受け取り、その人にぴったりの棺桶を作ります。その人の魂に失礼でないよう、その人のために一つ一つ、丁寧にまごころをこめて。そうして、作られた棺桶はすぐに遺族のもとへと運ばれて行きます。

死に近いところで働いていながら、死に直接は関わらない。私の職業はそんな不安定なものなのです。

そんなある日。私がいつも通り棺桶を作っていると、一人の紳士がやってきました。上等のお召し物に質のいいステッキ、きちんと磨かれた革靴を召したその方は、私のもとにしずしずと近づくと、一言おっしゃいました。「私の棺桶を作ってくださいませんか」

私は少し驚いて、その方を見ました。死後のために寸法を測りになる方はいらっしゃっても、生前から棺桶を作るなどと言う方に出会ったのは初めてだったのです。ましてや、死者の入れ物である棺桶を作っておこうなどとは、縁起が悪いにもほどがあります。人によつては、死が寄り付くとして、私の店にすら近付くこととはなさらなほほどです。

私の当惑を見て取ったのでしょう。紳士は少し悲しげに目を細めると、静かに口を開きました。

「人というのは、悲しいものです。いつその命が絶えるか分かりません。私とてそうです。明日かその次の日か、いつ死んだって不思議ではないのです。まして、私には家族というものがありません。生への執着もありません。どうか、あなたのそのよき腕前で、私の魂をおさめるのにふさわしい棺桶を作っていただけではないでしょうか」

そう言つて、紳士はほほ笑みました。私には、その顔がとてぞ寂しげにうつりました。死をとて間近で感じてきた人なのだ、初対面ながらに思いました。

よろしいでしょう。

私はその言葉とともに、紳士の採寸を行いました。紳士はじつと押し黙ったまま、私の言葉に従っていました。できあがったら、連絡をください。

寸法が終わると、紳士はそう言つて私のもとを去つて行きました。

私は注文の入つていた他の棺桶を配送し終えると、紳士の棺桶にとりかかりました。

採寸表をよく見ながら、紳士の体にぴったりの大きさに材料を切り、組み上げます。一つ一つの工程を、丁寧にまごころをこめて。

しかし、私の手は途中ではたりと止まりました。

どうしても、頭の中に紳士の笑顔が浮かんでくるのです。あの寂しそうで、悲しげな笑みが。

私は採寸表をながめます。書かれた数字一つ一つが重みをもたつて迫つて来て、あの紳士の一挙手一投足を思い出させます。

(私の棺桶を作ってくださいませんか)

私は工具をその場に置いて、ゆつくりと座り込みました。

次の日、私の連絡を受けて、紳士がやってきました。「棺桶ができたのですか」

穏やかなその声は、妙に乾いて聞こえました。私はいとも、いいえとも答えずに、紳士の手の内に小さな箱を差し出しました。

「これは」

不思議そうに尋ねる紳士に私は箱を開けるように促しました。紳士は、いぶかしげに眉をひそめたものの、ゆつくりと箱を開けました。

そのとたん、仕掛けは動きだしました。中の金属がくるりくるりと回り始め、そこにある突起が金属の薄く細い板をはじき鳴らします。聞こえ始めるのは愛らしい音ぴんと張り詰めた空気を揺らすように金属音が響きまします。

「空の棺桶なんていりませんよ」

私は言います。

「たとえ、明日にあなたが死のうとも、今のあなたは生きておられるのです。空の棺桶をながめ、いつか来る死を認識などせずに、今あるものを見つめてください。もつともつと死を間近に感じられるようになったら、私が責任を持つてあなたの棺桶をお作りいたします。それまで、このオルゴールをあなたのもとに置いておいてください」

私は深く深く頭を下げました。出過ぎた真似をしたかと少し不安になったのです。しかし、聞こえたのは紳士の小さな笑い声でした。

「こんなものまであなたは作る事ができるのですね。空っぽの箱よりもずっといい……」

そう言つて、もう一度ゆつくりと箱を開けました。そして、二人で長い間、それに耳を傾けました。

それから、季節が一巡りする間、紳士は幾度か私の店を訪れました。もう棺桶が欲しいと口にされることはありません。私が仕事をする横でオルゴールの奏でる音に耳を傾けていたりします。私も仕事の合間に紅茶をいれ、紳士とともにその音を聞きます。

私が紳士のプロポーズを受けるのはそれから間もなくのことでした。

応酬

あれは、空が初めて燃えた日

目の前には、一握りの大空

僕の声は君には届かない

差し出した手は虚空を掴む

翼を失くした鳥は墜ちてゆく

もう戻らない

友を亡くした心は堕ちてゆく

投げ出した命で空隙を狙う

目の前には、一握りの大空

あと少しで君に手が届く

それは、僕が初めて飛んだ日

ストラテジ

とある動物園では、ペンギンの親子がこんな話をしています。

「ねえねえお父さん、ぼくたちなんで空をとべないの？

ぼくたちちようるいっていつてさ、

トリのなかまなんでしょ。なんでトリなのにとべないの？」

「いいか、逆だよ。

お前はまだ小さいから、鳥なのに飛べないだなんて

ダサイって思うだろ。でもな、逆だ。

逆にそんなギャップがカワイイんだ。

鳥なのに飛べない、これで好感度をGETなんだぞ。」

「ふうん、わかった。じゃあさ、なんでぼくたちの足って

こんなにもみじかいの？」

「足が短いとストライドも短くなる。

お前はまだ小さいからそれがダサイって思うだろ。

でもな、逆だ。

逆にヨチヨチ歩いてるとカワイイんだ。

必死にがんばってる感がでて、好感度GETだ。」

「へえ、そうなんだ。じゃあさ、……」

ペンギンはちゃんと考えてます。

とある夢

目覚ましの音が鳴り響く。朝か。俺はそう思った。でも、不思議な夢を見た。女性恐怖症の俺が大学の同じクラスの女子にデートを申し込むと言うものだった。いや、夢かどうかもわからない。昨日は確かクラスの飲み会で酔って帰ってきた。どう帰ったのかも記憶にない。ただ、この夢は非常に現実性を帯びたものだった。実際俺は女性恐怖症だったがその女子とつきあってみたいと思っていた。何とも奇妙な夢だった。

それにしてもこの夢は本当の夢だったのか、それとも酒に酔って女性恐怖症がなくなっただけでやってしまったのか。登校途中にそのことを考えているとふと友人落合に出会った。そういうえば彼昨日の飲み会に参加していたっけ。俺は思い切って彼に聞いてみた。

「なあ、俺昨日飲み会で変なことしたっけ？」

「お前大分酔っていたな。でも特に変わったことはしていないかったぞ！どうしたんだ？」

と聞き返してきた。聞いたとたんにすっきりとしたが落胆もした。もしもこれが実際のことだったら。とりあえず俺の突飛な質問に戸惑っている落合にさつきまで考えていたことを話すと

「そんなのただの夢だろ。その子とつきあいたいと思ってるからそんな空想をするんだ！とこで、研究論文の方はどうなったんだ」

と落合は言った。確かに今朝は夢のことに気をとられて論文の方に頭が回らなかった。論文締め切りが2週間後なのに大したものを書いていなかった。これはヤバイ。落合と別れると早速「ベルヌーイの定理と飛行機の翼形状」についての論文作成に取りかかった。これで、大好きな酒ともしばらくお別れだと思った。

論文作成を始めてというものの結構精神的にきつい状態がつづいた。いやというほど無味乾燥な文章を書いてはラプラシアンや3重積分や微分方程式を何百通りも書くという面倒なものだった。朝6時に起きて翌日の3時に寝るという生活も最初の方はまだよかったものの、締め切り3日前とかになると大分身にこたえてきた。あの日見た夢が本当だったらと思うことがよくあった。その上酒も飲む暇もない。せめて、もう一度あの夢を見たいと願うばかりだった。

締め切り当日。最後の追い上げがなんとか間に合っただけで無事研究論文は提出。その日は疲れていて帰ったらすぐ寝てしまったものの翌日論文完成の飲み会兼俺の誕生日ということで飲みに行くことになった。

飲み会の始まる前だった。この日は男子だけでやるはずだった。一人落合が来るのが遅いので待っていると落合は例の女子を連れてきた。

「お前の誕生日にびつたりのプレゼントだろ！」

と落合は言った。俺はなぜ彼女が来たのかびつくりとしていた。

「あの時は論文を書かせるためにいわなかったんだけど、この前の飲み会で彼女にデートを申し込んでいたんだ！だから連れてきてやったぞ！」

と落合は言った。あの夢は実際の出来事だったんだ。そう思うと確かにこれは望んでいたプレゼントだった。彼女の隣に俺が座り誕生日を聞いた。コップにつがれたビールを飲もうとした時だった。

「飲むのをやめておこう」

と俺は言った。周りが不思議がって聞いてくるのでこう答えた。

「また空想にされてしまう」

空 蟬

うっせみ

小さな頃、近所の林で蟬の抜け殻を良く拾った。

「蟬は地中で長い時間を過ごし、それでも地上に出ると、たった一週間で死んでしまうんだよ」
父だったか、母だったかに教えてもらったこと。そのときの私には、蟬の命の儚さなんて判らなかつたけれど、きつと蟬は、とても孤独な虫なんだと感じた事は覚えてる。

※

私は、中学校に入学してから一ヶ月と経たないうちに、登校拒否となつてしまった。小学校の時から『明るく元気』というわけでは無かつたのだが、中学に上がる時に親の都合で引越しをする事になつてしまつたのが主な原因だ。新しい中学校では友人も出来ず、ただただ漫然と目を過していくだけだつた。そして、少しずつ学校に行く事を止め始めた。私も本心としては、かつてのように学校に通い、友人と共に青春を謳歌したいと望んでいた。しかし、一度学校に行かなくなつてしまつと、再び顔を出すのは非常に気まずい事だというのも、私は判つていた。

そんな日々が続き、学校に顔を出さなくなつて一年が過ぎる頃、親から声がかかつた。以前は学校に行くよう催促していた両親だつたが、最近では、あまりその事を口に出してはいなかつた。しかし、その日は珍しく話題を持ち込んできたのだ。

「もうすぐ、二年生になるわね」

そうだね。と私は返した。勉強は親に教えてもらつているし、学校側も結局は進級させてくれるという旨を伝えられていた。

「二年生になつたら、クラス替えがあるから、初めの日だけ学校に行つてみない？」

優しい口調とは裏腹に、母の言葉には拒否できない力強さも込められていた。それに母の提案は、私も、自分にとつて良い機会だと思つた。所詮はクラス替えなのだから、半分くらいは見知つた相手かもしれない。それでも、今のうちに、家につつと籠つている生活から成長しなければならぬと本能のように感じた。

※

新学年となり、数ヶ月が経つた。クラスメイトが騒ぎまわる教室の中に、私の姿があつた。いくつにも分かれて集団のどれにも属さず、ただ独り窓際の席に座つていた。こんな状況でも、以前のように登校拒否にならないのは、両親の期待をこれ以上裏切れないからだつた。かつてのような漫然とした日々、あの時と違うのは『家』という逃げ場を失つたことだ——もう私に地中に戻る権利は無い。

地中から這い出した蟬は、外の世界にどんな希望を持っているのだろうか。

ずつとずつと待つていた外界が、自分の望んでいた世界と違つたら哀しいのだろうか。

私は、ふと窓の外を見やる。

一匹の蟬が、響き渡る仲間たちの喧騒にまみれて

まるで空蟬ぬけがらのように風に飛ばされていくのを、見た。

流れ星

昔むかし、神様は不幸に苦しんでいる人間のために、流れ星が見えている間、願いがかなうようにしてあげました。そのため、夜空には、流れ星がたくさん見えて、しかも、ゆっくりとした動きでした。

最初の頃の人間は、次の年が豊作でありますように、とか、子供が長旅から無事に帰ってきますように、といったささやかなものでした。

ところが、人間はだんだんエスカレートして行って、どんどん悪知恵を働かせるようになりました。例えば、願い事が独占できるようにするために、他の人の願い事がきかないような願い事や、流れ星が見えない間にも願いがかなうような願い事を企てる人間が出てきたのです。さらに、神様の力までも奪おうと考えようとする人間も増えてきました。

そんな人間の傲慢さにすっかり腹をたてた神様は、本当に苦しんでいる正直な人間だけの願い事をかなえるために、そうした人間の真上の夜空に、少しの間だけ流れ星が現れるようにしました。

そうして、人間の世界は安定して、穏やかな生活が訪れました。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	いろ	8 pt	3 位	0 sp
		<p>そらいろ絵の具君への期待と期待はずれ。その具体相を通して、空の色っていろいろだねというきれいさを、さらり形にさせていただきました。</p> <p>夕焼けきれいな今週の表紙作品が、さらり3位に入りました。おめでとう！</p> <p>よいこのみなさん、おうちに帰りましょう。</p>		
02	赤い実	2 pt	9 位	0 sp
		<p>こちらも、きれいな赤がワンポイント・アクセントで効いてました。</p> <p>待っていることしかできない。けれども、待っていても叶わない。</p> <p>秋のさびしさ。魚くんの心残り。行間から、すうっと伝わってきます。</p>		
03	空の棺桶	10 pt	2 位	1 sp
		<p>えー！？ という仰天のラスト。ふつう、職人さん＝男性イメージで読んじゃうし、まあ、むりにふたり、くつつけんでも、という気がするのですが、が、が。</p> <p>そこを除けば、あとはまさにていねいな職人仕事が、ここちよいオルゴールを奏でてくれます。おめでとう銀メダル&UFOげっと!!</p> <p>特別賞：よろしいで賞 by 空飛ぶD班（店主が偉そう）</p>		
04	応酬	0 pt	10 位	0 sp
		<p>空戦パイロットふたり、でしょうか。</p> <p>すべてがクリアでなくてもよいけれど、少し霽がかりすぎたか。</p> <p>大きなものを小さくたとえた「一握りの大空」というフレーズが個性的で光ってました。</p>		
05	空想メルトダウン	6 pt	4 位	2 sp
		<p>歯欠けの歯車が刃を手に入れて世界を獲得するまで。</p> <p>じつに鮮烈に狂気を描ききってバイオレンス。怖さと痛さがぐすぐすと突き刺さってきます。</p> <p>特別賞：賞 by A penguin 班 / 発火能力者賞（ちょーかっこいい） by END（マシュマロ）班</p>		

06	ストラテジー	17 pt	1 位	2 sp	<p>無邪気を装いつつ演技するあの子、ですね。なるほどなるほど。何やら人間世界にも置き換えられそうな。</p> <p>会話にしたところが、自然な流れを作れて、いい仕上がりでした。</p> <p>大ヒットの一等賞&イチオシフレーズ大賞もさらいました。おめでとう!! 来週待ってます。</p> <p>特別賞：ペンギンショー by 反時計回り班 / 旭山動物園賞 by Http://班</p> <p>イチオシフレーズ：「好感度getなんだぞ」 × 5 「ペンギンはちゃんと考えてます。」 × 2 「でもな逆だ」</p>
07	とある夢	3 pt	7 位	0 sp	<p>TAさんのおひとりが、落語にあったよね、で、ああそうか芝浜か！ と。</p> <p>きっちり描き込んでストーリーはまずまずなのですが、「例の女子」ってナニゴト？友だちにすら「落合」と名前を与えてるのに作者さん、女子を「プレゼント」するんですかそうですか暗い夜道とフェミニストにご用心。</p> <p>イチオシフレーズ：「お前大分（おおいた）酔っていたな」</p>
08	夏のおもいで	5 pt	6 位	5 sp	<p>この作品の並び順が「9」になっていたのは、TAさんたちからのちょっとした愛情表現です。僕の指定席である「8」をくださいという作者さんからの熱いリクエストにお答えして、「8」だけど8番目じゃない席をご用意させていただいた次第。</p> <p>それにしても3段組ワザですか、やるなあ。</p> <p>特別賞：ちゃんと寝ま賞 by Black班 /愛し続けたいで賞 by 視力検査班（きゅんきゅん） / 有言実行賞 by I can Fly班 / 構成労働賞 by 空班 / 努力賞 by JAL班</p> <p>イチオシフレーズ：「どんなに離れていても.....」</p>
09	空蝉	6 pt	4 位	0 sp	<p>まるで抜け殻のようにここにいる自分。ウツセミというカタチになぞらえることで、その孤独感・寂寥感がずっと伝わってきます。</p> <p>悲劇と銘打つにはさりげなさすぎる、でも、日常にしっかり根を下ろした寂寥。</p>

3 pt

7 位

0 sp

10

流れ星

ラストはゆったりした語り口の寓話で。
しみじみテイストが、とても良いので、レイアウトをもう少し工夫したかった。
神と人との関係に思いを寄せつつ、それでは、よいこのみなさん、おやすみなさい！